

TRIAL &

JVC 日本国際ボランティアセンター会報誌 トライアル・アンド・エラー (試行錯誤)

ERROR

【特集】変貌するアジアの農村

アジアにおける外部環境の
変化のなかでJVCは何ができるか

【解説】人類の新たな共通目標となりうるか

地球市民の持続可能な
開発・発展目標 (SDGs)

【報告】NGO 非戦ネットへの関わり

NGO だからこそ
非戦の声をあげ続ける

ラオスの森はしばしば“ウドンソンブン”と表現される。“豊か”と訳せる言葉だが、車を何台も所有している、というような“富裕”というよりも、必要なものは何でも一通り揃う、といった自然の恵みを表すニュアンスで使われている。



村で収穫した大根で漬け物をつくるカンボジア・ドンソック村の女性グループ。村や市場で購入してくれた人が「おいしい!」と言ってくれることが一番嬉しい。「自分たちでもできるんだ」という自信が、新たな加工品づくりへの挑戦につながっている。

れを逃れるための賄賂などの危険がある。

合法就労が容易になるASEAN統合は、出稼ぎのプッシュ要因になります。ラオスで田植えを手伝う手間賃が上がっているのは、タイの最低賃金とも関係あるのでしょうか。

司会 出稼ぎで現金が入る。お金第一の社会になりつつある。

平野 ラオスの農村にも市場経済の波が来ています。ラオスは発電が主要産業の売電国で、電化率は高く電気代も安価。電化した村には、すぐテレビ業者が現れます。安価なタイの放送を見て豊かな生活に憧れる若い人が増えるのもまた道理でしょう。安価な中国製バイクをベトナム商人が売りに来ると、伝統の巻きスカートも、昔は自分で織ったけど、買う人が多くなっています。

自給自足的な側面がいまだにあるとはいえ、ラオスに桃源郷的イメージを持ち過ぎては、現実を見

誤るでしょう。

山崎 カンボジアでは海外資本の参入が続いています。プノンペン周辺やタイ国境、ベトナム国境付近では中華系企業などが運営する経済特区が次々できて、日系企業も進出。若い女性を中心に縫製工場などで働く人が増えています。

現金収入が増えても 解消されない貧困

司会 この変化の先、どんな社会になるのでしょうか。

山崎 JVC活動地での調査では、2007年と比較し農家の現金所得は平均2・7倍増加。でも、同時に化学肥料も普及している。これまで自給していた食料を購入しなければならなくなっている農家もいます。農業への労力を減らし、出稼ぎや他の現金収入源へ比重を移しても、結果的に支出も2・4倍ほど増加し、約6割の世帯で昨年一年間の家計が赤字でした。

現金収入の増加は必ずしも貧困



カンボジアの首都プノンペンでは
目覚ましい経済発展が
続いている

の緩和や解決にはつながらないよう
に思います。

平野 ASEAN統合の流れのなかで、日本を含む先進国や新興国は「タイ+ワン」(注2)を探していると考えられます。ラオス・カンボジアもベトナム・ミャンマーとともに域内の先進国に迫っていくよう、ということではインフラ中心の支援がされています。しかしラオスは「タイ+ワン」にならないと見られています。

ラオスは、外国投資による水力



市場経済の浸透にも、カンボジアの農村は自然の恵みに生かされている。魚獲りをする子どもたち。

発電、鉱山、植林など莫大な金が動く割には雇用創出が少ない。山がちな国土に少ない人口のラオスでは、経済特区など作って工場を建設しても、労働力の確保に苦労するとも聞きます。工業化率も極めて低く、変化は他国と比較すると緩やかになるかとも思われます。

それでも
自然資源は頼りになる

司会 変わらないものもあります。

家族の絆やコミュニティの支え合いとか。活動で大切にしたいものはあります。

山崎 調査で驚いたのは、農家の7割が森で食材用の植物を採集していることでした。川での魚獲りや田んぼでのカエル獲りは日常風景。でも暗黙のルールがあって、みんなが豊かに暮らせるよう、どの程度ならいいかを考えているんです。おすそわけの文化もある。家族の絆、コミュニティの支え合いなしに自然資源に頼る暮らしを送ることは難しいでしょう。

平野 ラオス人には、森林に行けば何か食べるものはある、自然は「ウドンソンブン」という自覚があります。「ウドンソンブン」は何でも揃う、不自由はない、といったニュアンスです。活動地域は少数民族が多く、彼らには、土地、風習、文化への強いこだわりがあります。彼らが変えたくないと感じ、誇りに思っている部分は大切にしていきたいです。

「基本は農家」は強い

司会 逆に、変化のなかに希望の芽は何かありますか？

山崎 子どもに良い教育を、病気に良い医療をと思うのは自然です。それには現金も必要。そういう意味で、出稼ぎなどでチャンスは広がった。

でも、出稼ぎに行くことはあっても「基本は農家」というのが強みです。農家である限り、工夫次第で食料を得ることができる。専業農家が兼業農家になることがあっても、それでも約7割が農家というのはカンボジアの強みです。
平野 開発援助関係者の認識も変わっています。焼畑も含めた伝統的な小規模農業や昆虫食への評価で、ラオスの伝統的暮らしは一定の評価を受けるはず。

司会 農村が変化する状況に、JVCの活動は対応できている？

山崎 農家の一番のニーズは現金

◎注2…タイで事業展開している日本企業が、人件費高騰や厳しくなる労働者確保に対応するため、カンボジアやラオスなどのタイ国境付近に事業を分散させるビジネスモデル。



ラオスの農村で投網を打つ男性。森には何でもあると信じている



ラオスでは伝統工芸である巻きスカートを織れる人は少なくなってきた

収入。ただし、自給を中心とした農業の改善や村での食品加工では、出稼ぎほど大きな収入にはつながりません。それでも、農産物や加工品の販売希望も多い。JVCも支援したいが、ビジネス未経験の農家に、ビジネスのリスクをいかに理解してもらうかに苦労します。

例えば、加工食品の店を市場に出したい場合、JVCが出店料や販売員の給与を出してくれるとかの期待がある。本来なら、自分たちで小さい規模から始め、徐々にビジネスを拡大するものですが、出稼ぎと同じように、短期間で一気に儲けようという発想になってしまふ人もいます。

平野 ラオスの村人も現金収入を得られるものならば得たいと思っています。でも、市場経済に上手に乗る人はごく一部。だからこそ、市場経済に乗れない、あるいは負の影響を受ける立場にいる人々には、森林からの自然資源採取、粗放的な農漁業と畜産業、そしてコ

ミュニティの相互扶助は重要なセーフティネットであり続けます。そこに着目した活動が、引き続き重要性を帯び続けるでしょう。

人の暮らしの 基本に戻る

司会 グローバリゼーションは、世界規模で農業コミュニティや農民的農業を解体しています。地域性をもち、具体的に実践的なJVCの活動は今こそ力を発揮する時ですが、今までの活動を基礎に何を付け加えたらよいでしょう。

山崎 本当の意味で「基本に戻る」ことです。活動地では、自生植物が70種類も伝統的に食されていていました。だが、多くが森などから姿を消していた。そこで、それらの栽培農家に枝を分けてもらい、挿し木で増やし配布したら、多くの農家が喜んで栽培しています。

どんなに収入が増加しても、やはり基礎となる生業としての農業は重要と農家は理解しています。

地域の遺産となるような農村風景、そして豊かな森をつくれるよう、農家と一緒に考え、取り組んでいきたいです。

平野 山崎さんも言うように、農業外収入が多くても、やはり農業や採集が重要です。一部を除き、農業外に主収入を求めることや、商品作物栽培に大きく舵を切ることはないように思います。

これから問われるのは、村の暮らしが市場経済に巻き込まれていくなかで、そうした森林からの自然資源採取や粗放的な農漁業や畜産業、そしてコミュニティの相互扶助の価値を、開発援助関係者が勝手に評価するだけでなく、まず主役たる村人と話し合うことです。

我々は村人から暮らしを学び、村人は我々に教えるなかで大切なものを再確認する。そんな相互交流的な関わりから、あるべき村の将来像を探り、希望が生まれると思います。



借金で土地を失い村を離れる農家も多い



変貌する カンボジアの表と裏

カンボジア事業担当 山崎 勝

「カンボジアはもはや貧困国ではない」。カンボジアを訪れ、そう思う人も多いであろう。

確かに首都の活気を目にして、統計上の数字という「表」を見れば間違っている。だが、目に見えない「裏」では、現金収入は増えれど生活が豊かにならない農村の現状がある。

伸びるGDPと自給率

カンボジアの首都のプノンペンでは日系の大型ショッピング施設

が開店し、駐車場には高級車が並んでいる。1990年代後半から続く経済成長によって、2000年には約300ドルであった一人当たりGDPは13年には1000ドルを超えた。それを表すように、10年頃には20〜30社程度であった日系企業は、14年には160社超と急激に増加している。

農業分野も順調に成長している。主食のコメは95年に自給率100%を達成し、13年時点で自給率は250%程度（農業省データ）に達した。政府も、コメ輸出を力

ンボジアの主要産業と位置付けており、コメも含めた農産物の輸出額は、03年の5万6450億リエル（約14・1億円）から13年には9万870億リエル（22・7億円）へと、経済成長全体に占める割合は低くても、着実に増加している。

増える出稼ぎと 共同作業の減少

その一方、テレビではカンボジアの貧村の子どもたちの現状が映し出されることもしばしばである。実際に、農村部ではいまだに栄養失調の子どもも多く、借金で農地を失う農家が後を絶たない。

また、伝統的方法での田植えを行う農家が少しずつ減っている。通常、田植えは1〜2ヵ月かかるが、種籾（たねあみ）を直接田んぼに播くことで、田植えの時間や労働力を節約し、出稼ぎによって現金収入を得ようとする農家が増えているのだ。JVCの活動地でも約4割の農家が国内外への出稼ぎに出ている。

その結果、伝統的に共同作業で行われてきた田植えが人手不足となり、人を雇うケースも増え、農村でも現金が必要になってきている。そうした状況がさらに人びとを出稼ぎへと駆り立てる。

指標では見えない 農家の現実を注視したい

出稼ぎの結果、農家の所得も増加し、国全体で見た場合の経済成長や一人当たりGDPなどの指標にもプラスの影響を与えている。

その一方、収入が増加したのに支出も増加しており、借金に苦しむ農家も多い。収入の増加は物質的な豊かさを実現しても、決して生活そのものを豊かにはいしない。経済的な指標や発展する街並みには見ることのできないカンボジアのもう一方の現実、つまり、目に見えない部分での変化にも注視していく必要がある。



森の恵みはまだ豊富。
筍を取ってきた女性

ラオスは変貌するのか

ラオス事業担当 平野 将人



ラオスの経済成長率は近隣諸国と比べても高い。政府目標の2020年までの最貧困国脱却は達成可能だ。経済成長の波は、これまで現金に依存せずに暮らしてきた農村部にもジワリと押し寄せている。その波は穏やかなままで留まるのか。農村部で起きていることを報告する。

活況を呈する都市部

ラオスの首都ビエンチャンは、他の東南アジアの都市のような、ある種複雑な爛熟ぶりを見せてい

るわけではなく、秩序や整然さをまだ感じさせる。だが、朝晩の大渋滞は久しぶりに訪れる人たちの目を白黒させる。

JVCが活動する第2の都市サワナケートも、変貌ぶりは顕著だ。車も、人気の日本車や韓国車に加え、欧州の高級車など多様さを増した。綺麗な西洋風カフェや整備されたサッカー場も数カ所できた。ニコンなどの工場を誘致した経済特区の効果もあり、数年前までJVCと青年海外協力隊の他は指折る程度だった日本人も、今では30

人を超える。

金融知識ゼロでの 借金と投資？

では、村の生活は変わったのか。村が大きく変わった印象は得られないが、発展する都市部と置いていかれる農村部というステレオタイプな描写もまた不適切だろう。

商魂逞しい中華系住民は農村部にも市場を作り、村には、品質は日本製に劣るが手に届く価格の中国製バイクを持つ人が増えた。ラオスは電化も進み、通電した村にはまずテレビが来る。メコン川を越えてくるタイの電波は、豊かな隣国への憧れを増幅させている。

契約栽培の進出もここ数年顕著だ。契約栽培自体が問題ではないが、サワナケート県では、事前に銀行から多額の借り上げをさせておいて収穫期に買い取りに來ないという深刻なケースも発生した。これまで現金に依存した生計を営んでいない村人が、銀行からの借

入金で投資することのメリットとデメリットを理解しているのか心配ない上に、銀行が激しい取り立てを行っていないために借金の深刻さもあまり感じていないようである。非常にねじれた状態である。一言で言えば、村人に準備ができていない状態での市場経済志向農業（この場合契約栽培）との遭遇だった。

自然が豊かなうちは 都市部への流出は少ない

一方で、山がちな広い国土に薄く人が住むラオスは、人々を都市部へと吐き出すプッシュ要因が低いとも言われる。カンボジアと比べても面積は1・5倍、人口は半分。そして森林はより豊かである。豊かな自然資源を少ない人口で分け合う環境では、人々を「都市に吐き出す」状況は起こりにくい。この豊かな自然資源という前提が崩れた時に、本当に大きな変化がラオスを襲うだろう。

いまさら聞けないQ&A Vol.03

読者のみなさんからの 質問募集中!! 会員担当:宮西まで
お寄せください。



Q イラクでは「宗派対立」がよく
取り沙汰されますが、
昔はどうだったのですか？

A フセイン政権時代は、宗派や宗教にそれほどこだわらずに
暮らすことができていました。
背景の異なる子ども同士も普通に遊んでいたといいます。
そうした頃の平和な状況を「取り戻す」必要があります。

日本では、お葬式の時になって「ところでうちの宗
派って何やったっけ？」ということがあると思います。
以前は、イラクでも冠婚葬祭の時に「自分の家の宗派
は何だったっけ」という程度の人たちがたいへん多か
ったといいます。

JVCの活動地であるキルーク市は、歴史的・政治
的な経緯や豊富な石油資源を有することからその帰属
をめぐり中央政府とクルド自治政府の対立があり、一
般の人々の間でも民族や宗教・宗派の違いなどによる
対立が厳しい場所です。JVCは現地NGOのINSAN
と協力し、10歳前後の子どもたちを対象にした「平和
のためのワークショップ」を実施してきました。現地
では、学校がアラブ、クルド、トルクメン、アッシリ
アと民族別に分かれており、異なる民族の子どもたち
は、互いに会うことさえ難しく、また宗派が違えば
交流する機会もありません。このような状況下で、異
なる背景を持つ子どもたちが、「平和」「共生」「多様性」
などについて共に学び考えと共に、その経験を通し
て互いを理解し、仲間意識を育むことを目的としてい
ます。さらに、子どもたちの家庭や学校、コミュニティ
にも働きかけ、親や教師、地域のリーダーらに「平和」
や「コンフリクト・マネジメント」などについて学ん
でもらい、地域の「平和的共生」を取り戻すことも目
指しています。

ここで注目したいのが、共生を「つくる」のではな
く「取り戻す」という点です。このワークショップの
中心的人物であったイスラム教徒のインティサルさ
ん（女性）は、以下のように教えてくれました。

「私が高校生でキルーク市に住んでいた頃、ジュリ
エットというキリスト教徒の女の子が隣の家に住んで
いました。彼女はイラクに住む多くのキリスト教徒が
そうであるように、とても優しい子で親切でした。当
時、私はいつも30分かけて彼女と一緒に登校していま
した。そして私たちは食べ物を分け合い、お互いの家
の家事も一緒にしていました。当時、学校の近くには
教会があり、彼女はその教会での活動グループのメン
バーの一人でした。彼女は学校が終わった後、私を教
会に招待してくれました。私は彼女と一緒に教会へ行
き、そこでとても楽しい時間を過ごしたものです。そ
れは私にとって、とても貴重な経験です。当時のイラ
クでは、民族や宗派が違ってても人々は問題なく暮ら
していました。JVCのワークショップでの、最後のセッ
ションを教会で実施しましたが、宗派や宗教が異なる
子どもたち同士も楽しい時間を過ごしました。彼らに
とって良い機会でした。何人かの保護者は『わが子が
このように楽しく遊んでいるのを見たことがない』と
喜んでいました」

ありふれたイラクの日常から、彼らが宗派や宗教に
こだわらずに暮らしていたことが分かります。「平和を
つくる」という言葉を聞くことがありますが、「つくる」
のではなく平和を「取り戻す」というほうが正確で
しょう。しかし新しい世代の子どもたちは、共生して
いた頃のイラクを知りません。これ以上、混乱が長期
化し、当時のことを知らない子どもたちばかりのイラ
クにしないようにする必要があります。

（イラク事業担当 池田 未樹）

カレンダー事務局 橋本 貴彦



人が席を譲る姿も感動するし、参考になります。「おっ！今のお兄さん、めっちゃスマートに譲ったなあ」とか、『気づかなくてごめんなさい』か、いい言葉だなあ』と。そしてその手本を次の機会に実践してみる橋本なのです。

「譲り道」は奥が深いのです。

9



2012年6月20日～22日、ブラジルのリオデジャネイロ市で開催された「リオ+20」の国連持続可能な開発会議。世界中のNGOが参加した。

進展する 新しいプロセス

人類の貧困問題を解消するため、2000年国連総会を契機に定められた「ミレニアム開発目標」(MDGs)が目標年15年を迎えた。8大目標(表1)、21の個別目標、そして60の指標を有

し、途上国の貧困・健康・環境問題などを解決するのが最大の眼目だった。

そして近年の急速なグローバル化で、それら問題は途上国に限定されない世界的共通課題として浮上したため、9月25日の国連サミットで、15年以降の枠組みとして「持続可能な開発のための20

[解説] 人類の新たな共通目標となりうるか ■■■■■■

地球市民の持続可能な 開発・発展目標(SDGs)

～地球サミット(1992年)からSDGsへ～

2012年6月、国連会議「リオ+20」で「持続可能な開発目標」(Sustainable Development Goals、以下SDGs)の策定が合意された。途上国に限定しない、貧困や飢餓の終焉、教育の提供、持続可能なエネルギーの確保などを実現しようというものだ。この国際合意に至る背景にはNGOなどの市民セクターの活動があったことは覚えておきたい。



JVC理事／
國學院大學経済学部教授
古沢 広祐

30年アジェンダ」が採択された。具体的には、MDGsに代わり「持続可能な開発目標」(SDGs)が動きたす。

これは92年地球サミットから20年後に開催された「国連持続可能な開発会議」(「リオ+20」)で提起されたもので、内容についての協議は今年8月に合意され、MDGsよりかなり多い17の目標(表2)と169の項目が示された。

国連をめぐる動きは政府(国家)間の調整が土台だが、国益という狭い利害を超えるNGOや様々な主体の参加プロセスが重視され、国連会議への関与が高まりをみせている。SDGsの議論においても、市民社会の声が少なからず影響を与えてきた。

「リオ+20」会合を観察しての感想として、当初MDGsがSDGsに吸収され弱められると途上国側は反応したが、先進国でも新興国でもないコロンビアなどの周辺的な中小途上国側のリードで議論

SDGsの17の目標 表2

- ① 貧困の終焉 ② 飢餓の終焉
- ③ 健康・福祉の促進 ④ 教育の提供
- ⑤ ジェンダーの平等 ⑥ 水の利用
- ⑦ 持続可能なエネルギーへのアクセス
- ⑧ 雇用の促進 ⑨ 持続可能な産業の促進
- ⑩ 不平等の是正 ⑪ 持続可能な居住の実現
- ⑫ 持続可能な生産・消費
- ⑬ 気候変動の軽減 ⑭ 海洋資源の保全
- ⑮ 陸域生態系の保護 ⑯ 平和・包接社会の促進
- ⑰ グローバル・パートナーシップの活性化

MDGsの8つの目標 表1

- ① 貧困と飢餓の撲滅
- ② 初等教育の普及
- ③ ジェンダーの平等推進
- ④ 乳幼児死亡率の削減
- ⑤ 妊産婦の健康の改善
- ⑥ HIV/エイズ、マラリア等疾病の蔓延の防止
- ⑦ 持続可能な環境
- ⑧ グローバル・パートナーシップの推進

が進んだことは注目したい。従来の発展の矛盾の後追いではない、新しいビジョン形成の動きと胎動を感じることができた。

今後への期待と課題

SDGsなどの理想が掲げられる反面、従来の発展パターンへの問い直しは遅々として進まない。巨額に膨れた世界経済は、大規模資金（グローバルマネー）流入で

富者と貧者の溝が拡がり、資源枯渇や環境悪化を招いている。92年地球サミットで期待された、巨額の軍事費を貧困・環境問題の解決へと転換する方向性などは忘れられ、世界の軍事費は再上昇しかつての規模を超えた。

そういう渦巻く矛盾のなかでも、市民セクター、NGO等の発言は力を持ちつつある。個別利害を超えた地球市民的な主体形成と、新たな参加と統治の在り方（ガバナンス）への模索が続いており、そ

の影響力が期待されている。昨今の国際環境条約などの場で変革を促す動きとしてそれは顕著だ。

大きな流れとしては、気候変動枠組み条約や生物多様性条約など国際取り決め（環境レジーム）が微弱ながら形成され、さらに国際条約でカバーできていない分野を含む総合的・包括的な内容として、SDGsが補完的に提示されようとしている。

持続可能な開発・発展に向けて多系化し複雑化している動向を、分かりやすい共通目標として明示することは、それなりに意義深い。不安定化し偏狭なナショナリズムや敵対・排他意識が復活したかに見える昨今の時代状況に、地球市民社会の将来方向を指し示す意義をそこに期待したい。

本来ならSDGsに、よりラディカルな革新的方向性の提示を期待したいが、現状の枠組みでは限界を抱えたものと言わざるを得ない。しかし、法的拘束力という点

で弱さを抱える目標であれ、実質的に地球市民の新たな結節点への土台形成となりうる。さまざまな場面で広範に活用する方策を形成することが、市民セクターの次なる課題と思われる。

その点では、92年の地球サミットの際に、政府の取り決めとは別にNGO条約を定める動きがあり、そこでの提起がその後の国際条約の展開にある程度の影響を及ぼしたことは参考になる。例えば、当時の「アジェンダ21」（注1）にし、「ローカル・アジェンダ21」（注2）が制定され、地域政策に影響を与えた（欧州で顕著だった）。

SDGs発効後に、市民セクターからのさらなるアクションの産出を期待したい。21世紀の人類がどう存続しうるか、大げさに言えば、目指すべきSDGsを私たちが現にっつけていくかにかかっていると云ってもよい。

◎注1…1992年6月にブラジルのリオ・デ・ジャネイロ市で開催された地球サミット（環境と開発に関する国際連合会議）で採択された、持続可能な開発を実現するために各国および関係国際機関が実行すべき行動計画。

◎注2…アジェンダ21が実施主体としての自治体の役割を重視し、自治体の取り組みを進めるための行動目標を示したもの。



8月30日の安保関連法案への抗議行動には、12万人が集まった。「NGO非戦ネット」も参加し、JVCの白川もスピーチに立った。



7月2日の「NGO非戦ネット」の設立イベントの様子。20社近いメディアの取材を受ける。壇上右端はJVCの加藤真希。SEALDsの中心メンバー奥田愛基氏も駆けつけた(右から3人目)。

アフガニスタンでは、日本は戦

後、武力ではなく経済で復興した
平和国家として尊敬を受けている。

だから、欧米のNGOが活動でき
ない地域でも、日本のNGOはき
め細やかに活動できる。だが、安
保法制が可決された今、平和ブラ
ンドはもう通じないかもしれない。

今回の安保法制では「駆け付け
警護」も大きな争点となった。紛
争地で活動するNGOが危険に晒
された時、自衛隊が救出するとい
うものだ。7月14日、NGO非戦
ネットは、これに反対する以下の
声明を出した。

『政府から独立して紛争地で人道
支援活動を進めるNGOに対し、
政府が独自の判断で「駆け付け警
護」と称して武器を使用し武装勢
力と交戦する事態となれば、NGO
の中立性までが疑われ、取り返し
のつかない犠牲を生み出すことを
私たちは懸念します』

NGOの安全な活動は「中立性」
で担保されている。それが疑われ

れば活動は不可能となる。

例えば、JVCのアフガニスタ
ン事業では、2万1千人の住民が
JVC運営の診療所に医療を頼る
が、中立性が疑われれば、地元職
員が危険に晒され、最悪の場合、
事業停止もありえる。すると、地
元住民はどこで医療を受けるのか。
医療を受けられず死ぬとしたら、
現政権が責任をとるのだろうか。

非現実的な 駆け付け警護

駆け付け警護はまったく現実性
を欠いている。JVCには「紛争
地における緊急時マニュアル」が
あり、日本人職員の拉致誘拐も想
定されている。その重要要素は、
いかに軍に介入させないかだ。軍
や警察の介入は、むしろ職員に危
険性が及ぶ。紛争地での経験で、
私たちが確信している最も効果的
な手段は、地元長老など地元組織
を通じた対話に他ならない。

安保法制に疑念を抱くのは日本

の団体だけではない。NGO非戦
ネットが呼びかけ人となり、安保
法制の採決に抗議する「国際共同
声明」を発表すると、わずか10日
間強の呼びかけで、予想を上回る
国内107、海外37カ国254の
NGOから賛同が集まった。

そこには、ノーベル平和賞受賞
のアメリカ・フレンズ奉仕団やア
フガニスタンの国内204のNG
Oが加盟するAfghan NGOs、
Coordination Bureau (ANCB)
からも賛同があった。ANCB
のアフマッド・ジャン氏は「日本
には、武力とは異なる解決策を採
り続けてほしい」とコメントを寄
せた。

安保法制が強行採決された以上、
NGO非戦ネットにはより一層の
活動が求められる。今後、安保法
制で決まった内容が実施される際
には現場の視点から問題を訴え、
廃案を引き続き求め、世界の各層
と連帯しながら、NGOとして非
戦の声を上げ続けていく。



内部会議 経過報告

JVCの中期目標と組織体制について

事務局次長 細野 純也

9月中旬、各国現場のスタッフと東京のスタッフ（加えて2名の理事）が一堂に会して、今後5年間の活動方針を議論する場を設けました。昨年度で年限が来ていたJVCの「中期方針」については、今後の5年間で対象期間とする「中期目標」を設定することを決め、また東京事務所内の組織体制面についても議論しました。まだ未確定な部分もありますが、取り急ぎ報告いたします。

表1
これまでの中期方針
2010～2014年度

- ① JVCは、紛争、災害、そして構造的な貧困、差別の中で困難な状況にいる人々が、安心して暮らせる平和な社会を実現するために、
- ② 人々の生命と尊厳を維持するための支援活動を行うと共に、それを通して、公正で平和的な、武力によらない紛争解決、平和構築を目指す。
- ③ また、グローバル化によって資源の収奪や格差、差別が拡大する中で、自ら困難を克服し、より良い地域内のつながりの回復と環境に配慮した地域循環のある暮らしや生き方をともにつくる。
- ④ それぞれの地域で社会を変えていこうとする人々が出会い、つながり学び合う場をつくり、新たな実践が生まれるように支える。
- ⑤ 各活動が持つ社会変革のメッセージを効果的に伝えることに注力する。

表2
新しい中期目標において
言及する事項

- ◎ 地域開発：RBA (Rights Based Approach) の側面を各活動に取り入れる。従来の「支援の網」から漏れがちの人々へのアプローチを模索する
- ◎ 人道支援：紛争を助長せず、また平和を促進・構築するような活動のための指針を整備する、「平和を構築する」活動を増加させる
- ◎ 日本国内の地域での取り組み
- ◎ アドボカシー（政策提言）／ネットワーク：より効果的／タイムリーにアドボカシー活動ができるようになる、各国の農民・市民との経験交流と提言の活性化を図る
- ◎ 財務／労務／人材育成の強化
正式な文面は後日公開いたします。
ご了承ください

「中期方針」から「中期目標」に

ちょうど5年前、2010年に実施した同様の会議で、JVCは「中期方針」を策定しました（表1）。JVCの各国現場においてその時点における活動を方針として位置づけたものだったのですが、今回は、現時点での活動というよりも、これからの未来の5年間を見据えてJVCは何をすべきか、ということにより重視した新しい「中期目標」を策定し、大枠で合意しました（表2）。同時に、「中期方針」から「中期目標」へと変更しました。この理由

は、この目標の期限が来た際に、実際に活動を通して目標が達成できたかどうかをより評価しやすくするためです。そのための指標も合わせて

既存の各ポリシーを 組み替え

これまでJVCは、過去の活動経験をもとに、活動の指針となるいくつかのポリシーを作成してきました。ただ、作成当初に比べて活動地の政治経済状況や社会背景が大きく変化している面もあり、今回の会議における「中期目標」の策定を機会に、より理解しやすくするためにその一部を組み替えました。これまでの、①「長期目標」、②「重点的に取り組む課題」、③直近の中期方針について、「ビジョン（JVCが目指す社会。①から抜粋）」「ミッション（レビジョンを実現するためのJVCの役割。①の一部および②、③の組み合わせ）」、そして「中期目標（レミッションのもと、期限をもって達成すべき目標）」とします。このうち、中期目標にのみ5年間の期限を設定します。既存の「行動基準」については、そのまま保持することになりました。

新しいビジョン／ミッション／中期目標については、内容を調整して今年度中に事務局案を固め、来年度の会員総会で確定する予定です。

現場での活動 より良くするために

普通の企業と同じく、NGOと言えどもその活動をより効果的に実施するためには、ヒト／モノ／カネ／情報といった限られたリソースを効率的に活用すべきであることに変わりはありません。今回の会議では、こうした組織体制面についても議論しました。組織としての意思決定のスピードを速めることや、各国の事業を横断的に捉える視点の強化、またスタッフが日々長時間働いていることに対して労務面を含めた形での問題提起がなされましたが、議論の時間が限られていたこともあり、会議期間内では明確な結論には至りませんでした（意思決定のスピードを速めることは合意しました。今後も継続して議論していきます）。

立派な目標を作っても、それが実際にスタッフの頭と心に落ち、普段の活動に活かされて初めて意味があると思います。「言うは易く行は難し」と言いますが、これからの日々の活動を充実させ、今回策定する中期目標を5年後に達成し、ひいては長期目標で掲げている「すべての人々が自然と共存し、共に生きられる社会」に一步でも近づくために、引き続き努めていきます。

12月には“聴く”ボランティアを！

コンサート事務局 石川 朋子



今年の指揮者であるキャスリーン・アラン



2014年東京公演では、145名が合唱団員として参加しました

大阪公演『メサイア』

日時：2015年12月6日(日) 15:00開演

場所：いづみホール

東京公演『クリスマス・オラトリオ』『マニフィカト』

日時：2015年12月12日(土) 15:00開演

場所：昭和女子大学人見記念講堂

※チケットはJVC公式サイトから購入できます。

「もっと多くの人にJVCの活動を伝えて、応援してもらえよう」と、創設者バスカビルは考え、1989年にこのコンサートを始めました。このコンサートには参加する方法がいくつかあります。「歌う」参加の合唱団員は、4月から練習を始めています。企業は、「協賛」することで参加し、コンサートを支えてくれています。これから募集する「当日ボランティア」は、コンサートの舞台裏を支えてくれます。そして、今日は「聴く」参加のお誘いです。

「ハレルヤ」で有名な『メサイア』

を大阪で、荘厳な『クリスマス・オラトリオ』と踊るようなラターの『マニフィカト』を東京で演奏します。今年の指揮は、キャスリーン・アラン氏。カナダ出身の演奏者を初めてお招きいたします。指揮者、そしてソプラノの歌手として北米を中心に活躍している彼女の華麗でいきいきとした指揮にご期待ください。ソリストには、現在注目度急上昇中の加来^か徹氏(バリトン)他、国内外で活躍する方々をお迎えします。年末の忙しい一日を、ぜひゆったりと美しい音楽とともに過ごしてください。

農の営み、その試行を未来に伝えたい

国際有機農業映画祭運営委員会共同代表 大野 和興



映画『草とり草紙』



映画『偽善の米』

日時：2015年12月20日(日) 10:00開会

場所：武蔵大学 江古田キャンパス

チケット：[一般]1,500円(前売り)/2,000円(当日)

[25歳以下]500円(前売り)/1,000円(当日)

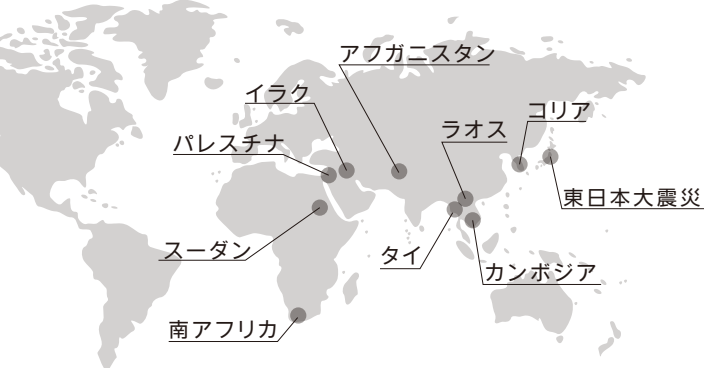
※下記公式サイトから購入できます。

公式サイト <http://www.yuki-eiga.com/>

9回目となる国際有機農業映画祭は12月20日、JVCなど多くの市民団体の協賛を得て東京・練馬区の武蔵大学江古田キャンパスで開かれます。今年のテーマは「農をつなぐ」。内外の6作品が上映されます。「若手百姓の本音トーク」や有機農産物・加工品、関連書籍などを並べた「有機なブース」も催されます。

上映する6作品は現代農業がもつ問題をえぐりながら、この先の農と食の在り方を示唆するものです。在来種を

守る人々のたたかい、伝統的な稲作が残るフィリピンに侵入してきた遺伝子組み換え稲との葛藤、貧困の拡大の中で食の自給を求める人々が「都市を耕す」行動、農業がもたらす禍(わざわい)を60年代日本の見る「農業禍」、空港建設に抗する百姓の思いを草とりという日常を淡々と描くことで表現した『草とり草紙』、障害を持つ人も持たない人も寄り添い生きる協働の場を描いた『アラヤシキの住人たち』など、どれも必見です。



JVCは現在、10の国・地域で活動しています。

プロジェクト一覧

6月後半～9月前半

コリア

絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』／
大学生交流

◎絵画交流：「東アジアの友達にあいさつをおくろう」のテーマで、各地で、等身大サイズの子どもたちを描き、各地から集めている。6月には韓国全羅北道完州郡において、韓国の子どもたちが、地元の名物であるイチゴをあしらったチマ（スカート）を着た女の子などを描いた。7～8月の夏休み期間には、横浜市内の学童などで日本の子どもたちが、韓国からの絵を見て隣国に思いを馳せながら、花火模様の浴衣姿など日本をイメージさせる人物像を完成させた。8月末の平壤では、残念ながら昨年のような絵画展は開催できなかったが、市内の小学校で日本から

訪問した朝鮮学校の生徒とともに6枚を共作。「ぼくらの朝鮮に遊びに来てね!」といったメッセージが添えられた。

◎大学生交流：上記平

壤での絵画交流の時期に合わせて、日本人大学生が同行している。今夏は7名の大学生が小学校訪問のほか、平壤外国語大学の日本語学科に通う学生たちと3日間にわたる交流を行った。平壤郊外の龍岳山ハイキングでは、山頂にてワークショップも実施。お互いに抱いていたイメージと同じところ、違



展示はかなわなかったが、日本から届いた絵を見て「あなたの親友より!」とメッセージを寄せる平壤の子どもたち

うところの意見を出し合ったほか、学生交流をより良くするためのアイデアを交換し合った。「実際に会う」こと自体が困難な現状に鑑み、それぞれの地域において自分たちの体験を伝えていくことが関係改善につながりうる、といった意見が双方から出された。(寺西)

スーダン

紛争による避難民・
難民への支援
(南コルドファン州)



完成した住居に入居した避難民家族

紛争が続く南コルドファン州の州都カドグリ周辺、及び国境を超えた南スーダン側の難民キャンプで、戦闘を逃れた避難民・難民に対する支援を実施している。カドグリ郊外で建設していた避難民再定住用の住居100戸が8月に完成。州政府、国連難民高等弁務官事務所と協力し、建物の軒先や空地の仮囲いの中で生活していた100家族の避難民を入居者として選定、すでに大半が入居を完了した。

難民キャンプでは、難民自身が運営する幼稚園への支援を実施している。6月には日本人職員が2年ぶりに現地を訪問、JVCの研修を受けたボランティア教員を各幼稚園に訪ね、クラス運営が大きく改善されていることを確認した。今年も、新任の教員を対象とした研修を9月後半に予定している。

(今井)

カンボジア

生態系に配慮した
農業による生計改善
／環境教育／資料・
情報センター



活動村で環境に関する基礎知識を解説するJVCスタッフ(写真左)

◎生態系に配慮した農業による生計改善 (CLEAN)：これまでの試験農場運営・栄養菜園および堆肥作り研修・食品加工研修に加え、新たに、安定的食糧自給に関する調査 (180世帯) と、加工品の一つとして乾燥ハーブ (7種) の販売に向けた研修と生産支援を行った。

◎環境教育：今年度より新たに活動対象校となった6校の教員 (20名)・児童 (187名)・学校支援委員会 (30名) を対象に、学校菜園作り・(11月の植林祭に向けた) 苗木作り研修と、環境基礎講座 (計10回) を実施した。

◎資料・情報センター (TRC)：コンサエン村に開設した地域資料センターへの運営支援を継続するとともに、農業事業スタッフによる活動報告会 (2回) を実施した。(皆嶋)

パレスチナ

学校・地域保健事業(東エルサレム)／栄養失調予防事業／アドボカシー



東エルサレム事業のサマーキャンプの参加者たち。環境保全や衛生について学んだ

◎栄養失調予防事業：現行事業は7月末に2期目を終了。この1年間で、5歳以下の子ども1,788人、その子どもの母親及び妊娠期にある女性など5,849人、ボランティア36人、合計7,673人を対象に活動を行った。結果、2期目終了までに、貧血などとして診断された子どもの7割以上に症状の改善が認められ、栄養に関する知識についても約8割の対象女性に向上が認められた。8月からは、本事業の最終年である3期目に向けた活動を開始している。

◎学校・地域保健事業：延べ13,763人の子どもに健康教育や健康診断を提供するなど、予定を上回るスピードで活動が行われ、子どもたちの生活習慣や学校環境を改善することに大きく貢献した。現在、過去3年間にトレーニングを受けた60人超の教師、約180人の学校保健委員会の生徒、約150人の救急隊ボランティアが地域で活動を行っている。

◎アドボカシー：金子と並木が、7月に6回、8月に1回、9月に4回、シンポジウムや映画上映会などでパレスチナの現状と現行事業に関する報告を開催し、計455人の参加者があった。また、8月25日には並木が他NGOとともに、参議院議員(民主党)の牧山ひろえ議員を往訪し、ガザの現状について説明した。(今野・金子)

タイ

農村派遣研修／
日・タイ経験交流／
医療支援(タイ南部)



ミャンマーからの出稼ぎ労働者への聞き取りのため、彼らの居住地を訪れる

◎農村派遣研修：募集を続けたが最少催行人数に満たず、15年度のプログラムは催行中止とした。

◎日・タイ経験交流：福島原発事故の経験と教訓を、原発建設計画が検討されているタイ社会において発信することで、原発の潜在的リスクをタイの市民社会が学ぶ機会を提供することを目的に、福島の有識者をタイに招いて2016年2月にセミナーを開催予定。本セミナー開催のための助成金が6月末に採択されたことを受け、その準備を進めた。(下田)

◎タイ南部での医療支援活動：8月下旬にFED活動地を訪問し、事業の進捗を確認するとともに、ミャンマーからの出稼ぎ労働者への聞き取りなどを行った。現在支援している医療事業以外のFEDの活動について理解を深めるとともに、体制面から彼らが必要としている支援も共有した。今後の展望について検討する良い材料を得ることができた。(平野)

南アフリカ

HIV陽性者支援
(リンポポ州)



畑の作物の違いを共有する菜園活動参加者たち

5月30日～6月7日にかけて、菜園活動で活躍する9名が東ケープ州カラ地域を訪問。以前JVCが自然農法による家庭菜園活動を共に実施していた人びとを訪れ、交流を図った。

7月13～14日には、ボドウェ村の子どもケアセンター(以下DIC)の組織強化を目的としたガバナンス研修を実施した。6月26～28日、8月17～21日の2回に分け、DICの日々のアクティビティをより年齢に合った楽しいものにするための研修を実施した。スカウト活動からヒントを得たこの研修では、子どもたちのリーダーシップ育成方法や、学びのあるゲームの実施方法などを学んだ。

7月末には東京事務所からのスタッフも交え、2015年11月の事業終了を目前とした事前評価活動を実施した。(富田)

ラオス

農業・農村開発／
土地森林保全事業
(サワナケート県)



ワークショップで女性の参加の重要性を伝えるスタッフ

通常なら6月中旬から本格的に降り始める雨は6月末になっても降らず、サワナケートの村々は干ばつの問題を抱えた。この時期は、苗床に植えた稲の幼苗を雨で柔らかくなった田んぼに移植する大仕事があるが、雨が降らないため移植できないまま幼苗が枯れてしまい、村の人たちは大打撃を受けた。JVCの稲作技術改善活動も同様に影響を受け、種もみを一部配布するなどの対応をしたが、このような気候変動や災害の問題には極めてもらい村の生活を目の当たりにした。7月には雨が降り始め、稲作に関する技術研修をアサボン郡の3村で集中的に行った。現在は稲が順調に育っている。

土地・森林に関わる活動では、魚保護地区設置活動の改善に力を入れ、水源や漁業の実態を把握するための簡易調査表の作成や、女性の参加を促すためのワークショップを行った。また、土地や森林に関わる権利をイラストと文章で説明する法律カレンダーの検討会議が開催された。カレンダーの作成は他の団体と協働で行うために、担当スタッフは度々ビエンチャンへ出張し会議に参加している。9月初めには、半年に一度の全体会議を開催し、活動の進捗共有、問題分析、活動改善などについて話し合った。(林・渡久山)

アフガニスタン

地域保健医療事業／
教育支援(ナンガルハ
ル県)／アドボカシー



CHWたちのスタディーツアーの振り返り風景

◎地域保健医療事業：診療所での医療サービスを補完するための仕組みであるCHW（地域保健委員）と連携を進めている。昨年に続いて、他の地域の協力を得てCHWのスタディーツアーを催行した。近隣の村のCHWの活動を視察するものであり、今回は女性のCHWの交流も実現した。参加者からは、お互いの取り組みの長所・短所を比較しながら改善できる点を洗い出したり、自分たちの取り組みに自信を深めたりできたと好評を得た。また、カルテの記録を見て受診回数が非常に多い患者家族を選び出し、家庭を訪問して衛生状況の確認や保健アドバイスをを行った。状況の改善を確認するため二度目の訪問を年度後半に予定している。

◎教育支援：学校の図書室や、JVCの協力で地域に設置した資料室の管理を担う村人に向けて“図書館研修”を実施した。図書館が単に本を保管する場所ではなく、交流の場や本の読み聞かせを行うこともできるといったアイディアを得ることができ、JVCの教育事業担当者にとっても今後の教育分野での事業展開を考える良い機会となった。（加藤）

気仙沼

ししおり
鹿折地区での
復興支援



夢中で玉を投げる参加者

6月21日、旧浦島小学校の清掃活動を実施し、地区住民など約50名が参加した。7月5日には、4集落の住民の交流を目的とした「第1回浦島地区大運動会」を開催した。浦島小学校の閉校後、約3年ぶりの開催となる運動会には約80名が参加し、住民からは「久しぶりに会えた人がたくさんいたので嬉しかった」などの感想が聞かれた。

鹿折地区集合型災害公営住宅の入居予定者の顔合わせを目的とした「鹿折あづまっぺ！『趣味のじかん』」を3回開催し、延べ59名の参加を得た。市内各地域から参加した人々は、絵手紙作りや健康麻雀などを通じて交流を深めた。7カ所の仮設住宅を対象に、住民の心身の健康維持を目的とした交流会を12回開催した。交流会では医療分野の専門性を有する地元組織の協力を得て、個別の健康相談や不眠についての講話などを行った。

7月から9月にかけて、防災集団移転のアドバイザー派遣を毎月実施した。まもなく開始となる宅地の引き渡しに向けて、移転予定地の見学会や団地内の「まちづくりルール」に関する最終確認などを行った。（伊藤）

南相馬

仮設住宅でのサロン運営

仮設住宅におけるサロン活動を継続。今年に入って仮設住宅から復興公営住宅に移る住民が増加、相対的に仮設住宅の入居者数が減少しており、サロンの利用者も減少傾向にある。特に次の生活を決められない高齢者世代が仮設に残り残される傾向にある。公営住宅への移り方など、情報提供にも努めた。また、社協や仮設に常駐している生活相談員とコミュニケーションを取りながら孤独死が出ないように見守り体制を強化している。阪神・淡路大震災の例から見ても、仮設から移り住んだ後の復興公営住宅でも孤独死が発生する恐れがある。復興公営住宅住民と、同自治会からサロンを開設したいとの相談があったために調査を実施。ベストな方法を探っている。（白川）

イラク

パートナー団体の
アリー氏を招聘

JVC内の人道支援などに取り組む事業間で、世界中で起こる紛争をどう止めどう防ぐのか、「武力によらない平和」がどのように可能で、有効なのか、その課題などについて議論する場を設けた。そのスピーカーとして、イラク事業の現地パートナー団体のINSANの代表のアリー氏を招聘し、インプットをいただいた。また、東京と富山において、昨年6月以降の混乱する現地の様子と、国内避難民の受け入れをきっかけに地元のコミュニティと避難してきた人たちとの融和の必要性について伝えるための報告会を実施した。報告会でアリー氏は、「どんな国も軍事国家の下では発展できません。NGOだけではなく人と人とのつながりが平和につながります」と訴えた。（池田）

調査研究・政策提言

外務省・JICAとの
政策協議／各種提言

◎第59回財務省NGO定期協議会（6月17日）：標記会議に渡辺が参加。
◎NGO・外務省定期協議会2015年度第1回政策協議会（7月17日）：標記会議に谷山、高橋が参加。
◎NGO-JICA協議会（2015年度第2回：9月1日）：標記会議に谷山が参加。
◎プロサバンナ事業関連：
【1】第12回プロサバンナ事業に関するNGO・外務省意見交換会（7月24日）：標記会議に渡辺、高橋が参加。【2】現地調査（8月）に渡辺が参加（本誌19ページ参照）。【3】モザンビークの元農業副大臣・現プロサバンナ事業担当官らが来日した際に、外務省・JICA・NGOを交えての意見交換会が開催（9月1日）。これに渡辺が参加。（谷山）



今回訪問した農民組織の畑。
メイズ(トウモロコシ)、マメ類、野菜など様々な作物が植えられている

支援の「結果」と 「成果」の違い

南アフリカ事業担当 渡辺 直子

7月にモザンビーク最大の小農組織UNACのメンバーが来日し、8月は3週間強に渡る現地調査を実施した。9月にはモザンビークより元農業副大臣・現プロサバンナ担当一行が来日し、意見交換の場を持つなどしたが、今回は調査中の出来事から「事業の成果」について考えてみたい。

「役に立つ」支援への不満？

乾期だというのに、目の前に広がる緑あふれる見事な畑。モザンビークで訪ねた農民組織の共同畑だ。5ヘクタールの畑の真ん中に貯水池があり、水路が畑中に張り巡らされている。数年前に農民らが手で掘ったという。土曜日の朝早くなのに、すでに男女合わせて10人を超えるメンバーが熱心に作業をし、小さな子どもたちも遊びながら手伝っている。

昨年この農民組織にプロサバンナ事業より電動水ポンプが貸与され、種が提供された。今年4月の調査で、この組織のリーダーに話を聞いた際、事前の合意にもかかわらず、自分たちが希望していたものとは違う種が遅れて配られ、満足いく生産ができず、水ポンプ代が返せない可能性があるとの不満と不安を話していた。

今回はその後の話を聞いた。今年の種は、担当官と交渉し、自分たちが店で購入したために

問題はなかったという。また、電動水ポンプには、一定の速度で早く水を畑に廻せる利点がある(それで生産性があがったか?)との問いに回答はなかったが。要は「それなりに役に立っている」とのことだった。だが、農民らが強調したのは、次の一言だった。「プロサバンナは私たちの話をまったく聞かない」

成果を

「出してくれている」現実

一体どうしたことなのか。混乱しつつも、畑を案内してもらった。道中、生産状況や種、販売先、メンバーのことなど、たくさん話を聞かせてくれた。3時間後、立ち去る段になって、本音が口にされた。「プロサバンナは私たちを人として尊重していない」

自分たちにはこれまでしっかりとした農業の経験があり、ヴィジョンもある。生産量をさらに上げたいが、化学肥料は土を傷めるから有機肥料を試すのに養鶏をやりたい。鶏糞は有機肥料として使え、鶏は家で食べるか、町にも近いから販売もできる。しかし、プロサバンナ担当者は「養鶏は君たちには無理だ」と言い、電動水ポンプと希望と異なる種が遅れて貸与された。

我々NGOが現地で活動する際、最も苦労するのが、人びとが本音のところで何を考えているのかを知り、彼らを取り巻く現実や事実をつかむことである。いくら人びとに近い立場で地域に入るとしても、出会った時点で「支援する側/される側」というある種の上下関係が出来上がっている。だから、相手はこちらが喜びそうなことしか言わない。これに気づき、乗り越えるための努力をしなければ、結局活動は続か

ず、失敗する。たとえそうした関係性のままで活動がうまくいったとしても、それは相手がこちらに合わせる努力をし「成果を出してくれている」からであって、効果的な事業を行ったことによる「成果」ではないのだ。

今回のケースがまさにそうだった。事業は「それなりに」役に立っているが、なくても困るわけではない。むしろ事業が来たことで「見下されている」という不快感が残された。別州の農民組織では、希望していなかった「製粉機」が押し付けられた。機会は数カ月間使わずに放置され、組織内が分裂し、製粉機を返すとの結論を出したことも、今回の調査で分かった。

信頼関係の不在がもたらす結果は

一方的に「あなたのため」と押し付け、「決めるのはあげる側だ」という態度は、むしろ相手の尊厳を傷つけ、信頼を壊す。「援助」や「支援」というフィルターを通すと、人と人が接するときに大切なこんな簡単なことが見えなくなる。

そして、このような信頼構築の失敗により、私たちの税金が必要以上に使われてしまっている。マスタープラン策定は2013年9月に終了予定だったが、「市民社会との丁寧な対話」を名目に延長され続け、4・5億円以上が追加で投じられている(外務省情報)。しかし、この間、逆に信頼構築は遠のき「対話」すら成立していない状態にある。

たかが対話、されど対話。このまま事業を進めたところで、出てくるのは単なる「結果」であって「成果」でも「成功」でもないと思えてならない。



終了後、参加者のみなさんからコメントを付箋に書き残してもらいました。



枝廣氏をファシリテーターとしてパネルディスカッションは進行了ました。

9/25(金)東京・渋谷区(東京ウィメンズ・プラザ)

JVC35周年記念シンポジウム 世界から中心をなくそう。 ～奪う豊かさから、自足する豊かさへ～

会員・支援者担当 宮西 有紀

JVC35年。カンボジアをはじめJVCの活動地でも格差が生まれつつあります。経済成長だけに依存せず、一人ひとりが主人公になれる社会を、どう実現していくか。
「奪わず奪われない」生活を実践してきたパネリストから、多くのヒントを得ました。

一人ひとりが中心になるために

第一部の基調講演は、代表の谷山博史による「経済成長と開発のあり方を問う」。近年のラオス政府によるNGOへの締め付けやカンボジアの農村において広がる格差を例にあげて、特にアメリカをモデルにした経済開発政策の限界について話しました。
JVCはタイの農村での活動で「農村を経済成長の踏み台にしない」ことを学びました。その後の「地域の市場」の活動で「地域循環の経済と地域性の再生」に取り組み、近隣都市に住む者と農村との農産物を通じた循環につながりを生み出しました。このような「地域を越えた共生の場」として地域同士がつながる(「ネットワークする」)ことが、地域を超えた課題に対処する際に重要だと指摘しました。一つひとつの地域がそうであるように、人々と課題を共有し解決していくNGOも一つひとつが中心である、つまり中心は私たちなのだとして、世界から中心をなくそう。というJVCの新しいキャッチコピーを紹介しました。

古くて新しい「経済成長と豊かさについて考える」ということ

次に、パネリストに枝廣淳子氏と高坂勝氏を迎え、パネルディスカッション「経済成長は本当に人

パネリスト紹介

枝廣 淳子 氏

幸せ経済社会研究所所長。東京都市大学環境学部教授。環境ジャーナリスト。翻訳家。NGOジャパン・フォー・サステナビリティ代表。

高坂 勝 氏

Organic Bar「たまにはTSUKIでも眺めましょ」店主。「NPO SOSA PROJECT」創設運営。「緑の党グリーンズジャパン」の初代共同代表。「脱成長ミーティング」主宰。

を幸せにするのか？」が行われました。枝廣氏は、経済成長は必要だが続けることは不可能だという

「経済成長のジレンマ」をあげ、「経済成長そのものをどう考えたらいいか」、「地方へ移住するなど一人ひとりの価値観はシフトしてきている」として、ダウンシフトーズ(注1)の草分けである高坂氏に価値観を変えたきっかけを聞きました。高坂氏は、勤めていた会社の成長自体が資源の収奪につながっていることが心労となり退職。「経済成長しなくても幸せになれる生き方をつくらなければ」と、自身で成長しない店(商売)を始めました。当初は週休1日で営業していたものの、高坂氏の生き方を見て退職する人が増え、お客も増え、店が成長しそうだったので、週休2日(今では週休3日)へ変更した、というエピソードには、会場から笑い声が起こりました。

谷山は、「経済成長ではない豊かさがあるとして、しかし私たち自身はそれを実践できていない。そこには矛盾がある」と疑問を投げかけました。高坂氏は、社会における「構造的暴力」について、会社で上司から不正を命じられて実行してそれがトラウマになる、という例にあげて、「自分の収入のために、何かを犠牲にしている」「それは個人の悩みだが「経済の闇」でもある」「しかし、価値観が変われば、同じ収入でも幸せが変わる」と答えました。

枝廣氏がコーヒーフレッシュを例にあげて(主な原料は牛乳ではなく植物性油脂であり、その確保のために海外で大規模な伐採も行われている)、私たちの暮らしが気づかなくても世界とつながっていること(「自分自身が、構造的暴力の一部になりうることを喚起されたのちに、高坂氏が言われた「シンプルに暮らしこそ、健康で、愉快で、人となることができる」「小さい生業こそ、本当に豊かな暮らしができる」という言葉が耳に残った人は多いのではないだろうか。

世界を豊かにするために、まずは自分を豊かにしていく

質疑応答では、ブータンのGNH(国民総幸福量)に関して、世界から中心をなくすために日本と世界がつながる方法は?という質問がありました。枝廣氏がGNHについて説明、「大事なものは守りつつ、必要な発展はしていく」ブータンの姿勢について回答しました。高坂氏は、後者の質問に対して、経済成長以外の選択肢があることを知ってもらうのが大事だと回答しました。「世界から中心をなくそう」とは、裏返すと「世界中が中心になる」ことで、中心から降りる新しいモデルを見せてほしい、というJVCへのエールもありました。

最後に、枝廣氏からドネラ・メドウズ(注2)があげた「世界を変える5つのこと」の紹介があって、シンポジウムは閉会しました。その5つとは、①ビジョンを描くこと、②ネットワークをつくること、③真実を語ること、④学ぶこと、⑤愛すること。本会を通して、JVCが35年前から大切にしている軸を改めて理解していただき、自分が世界とどうつながるか、自分にとっての「豊かさ/幸せ」について考える機会となったのであれば幸いです。

◎注1…「浪費するアメリカ人」(2000年、ジュリエット・B. ショア著)の中で生活態度の変化をとったダウンシフター(減速生活者)についてはじめて紹介された。◎注2…「世界がもし100人の村だったら」の原案者。

イベントあらかると

7月～9月

いべんと・ピックアップ!

9/13(日) 東京・新宿御苑前

チャリティサロンコンサート「昼さがりのショパン」
～紛争下を生きるアフガニスタンの子どもたちのために～

広報担当 大村 真理子



終演後の西村さん(前列左から2人目)を囲んで。スタッフは民族衣装着用です!

東京都新宿区にある音楽教室・マエストローラ音楽院の主催で毎年開催されるチャリティサロンコンサート。2011年から年に1～2回のペースでJVCの支援につながるコンサートを開催していただいております。早くも8回目の開催となりました(同院の理事長は、JVCの会員でもあり、昨年からはその豊富な企業経営経験を活かすべく理事に就任した木下尚慈です)。

今回ご協力いただいたミュージシャンはピアニストの西村美穂さん。早くから国内外で数多くのコンクールに入賞し、現在はワルシャワのショパン音楽大学大学院でショパン研究に没頭している新進気鋭のピアニストです。学生時代から社会貢献活動に関心が高く、音楽を通してチャリティの輪を広げる西村さんから、

今回は特に「教育」の分野への支援にしたいとのご希望をいただき、JVCから複数の事業の紹介をさせていただいた結果、アフガニスタンの教育支援のコンサートとすることとなりました。

当日、西村さんが会場に到着すると、その華やかな雰囲気スタッフ一同感嘆の声。到着後すぐにリハーサルを開始し、本番直前まで演奏を続ける西村さんの姿に、皆、改めて身が引き締まる思いで本番を迎えました。

演奏の前には、JVCアフガニスタン事業の紹介を統括の小野山と事業担当の加藤から。直前にドバイで現地スタッフと大きな会議を持った2名(現在日本人は治安の関係上、アフガニスタンへの入国が困難なことから、第3国で会議を開催)から、

現地からのビデオレターが届けられると、会場からは自然と笑みがこぼれます。喜んでいただけたようで何よりでした。

その後、いよいよ西村さんの登場です。その迫力のある生演奏に、会場が一体となって聴き入る贅沢な60分間となりました。アンケートには「とにかく演奏が素晴らしい」「一気に西村さんのファンになった」など、その演奏の素晴らしさに感動する声があふれていました。

このコンサートでの収益は15万円を超え、その全額をJVCアフガニスタンへのご寄付としていただきました。改めて、マエストローラ音楽院、西村さん、ご来場の皆さんにこの場を借りて御礼申し上げます。音楽×チャリティの輪、今後も広がって行きたいと思います!

その他の主なイベント

7/2(木) 東京・中央区

NGO非戦ネット設立イベント

7/5(日) 神奈川・川崎市国際交流センター【出展】

2015インターナショナル・フェスティバルinカワサキ

7/8(水) 東京・港区(明治学院大学)

土地を生かし、農業に生きる
UNACの取り組み

7/9(木) 東京・参議院議員会館

なぜ、現地農民は異議を唱えるのか?

7/9(木) 神奈川・逗子市

大規模空爆から1年・紛争地パレスチナの今

7/11(土) 東京・中央区

飲んで笑ってみっちり語るドキドキ旅話

7/13(月) 東京・台東区

現地事業を体験しよう!(イラク)

7/18(土) 東京・新宿区

カシミール・パレスチナで
今起こっていることは?

7/20(月) 東京・文京区(東京大学)

ガザは今どうなっているのか

7/25(土) 東京・渋谷区

ガザ紛争から1年
～国連はなぜ解決できないのか～

8/2(日) 東京・港区

レ・ロマネスク Ti-Q-No-Ko夏まつり

8/5(水) 東京・JVC東京事務所

ガザ戦争から1年
～戦後を暮らす人々の困難と課題～

8/16(日) 東京・新宿区

映画『花と兵隊』上映会

8/22(土) 東京・JVC東京事務所

嫌われもの(排泄物・昆虫)が救う未来

8/25(火) 東京・JVC東京事務所

JVC居酒屋
「NGOの現場から考える安保法制」

9/5(土) 東京・台東区

スーダンを満喫 スイーツ編
～作って、食べて、お話を聞こう～

9/8(火) 東京・台東区

『「積極的平和主義」は、紛争地に何を
もたらすか』出版記念緊急イベント

9/11(金) 東京・新宿区

孫崎享さんと考える 東北アジアの
平和とNGO・市民交流の可能性

9/12(土) 東京・千代田区

若者世代が考える
「戦争」に関わる国のリアル

9/15(火)～10/4(日): 神奈川・鎌倉市

竹沢うるま「いのちいっぱい」
写真展&トークイベント

9/15(火) 東京・新宿区

コミュニティが描く未来
～HIV対策における地域の役割とは?～

9/16(水) 東京・渋谷区

モンベルサロンイベント
ラオス、周回遅れのトップランナー!?

9/17(木) 東京・台東区

オレたちの「喜怒哀楽」
～軍事介入されたイラク・アフガンより～

9/17(木) 東京・JVC東京事務所

ラオスにNGOはもう要らない!?



JVCなひと



JVCの 会員になってから

JVC会員 遠藤 歩

私とJVCとの関わりは、今勤めている会社の中でボランティアに参加したことから始まりました。

社会人になってからだんだんと社会問題、国際問題に関心を持つようになり、知識や経験はゼロでしたが、そんな自分にも何かできることがないか？と考え、思い切ってJVCに飛び込みました。

現在、世界で起きている理不尽な問題は数多くあります。それを知らずにただなんとなく生活している自分に違和感を感じるようになりまし。まずは色々な問題に目を向けること、知ることが大事だと考えていた。実際に現場を見ているスタッフの方々の生の声を聞きながらお手伝いさせていただいていると、非常に勉強になります。

今年7月に、「飲んで笑ってみっちり語るドキドキ旅話」というイベントのお手伝いをさせていただきました。現場に関わられているスタッフの方々によって、それぞれの国の事情がここでもしか聞けないような内容で展開されて非常に面白かったです。

私自身、このイベントの時に「へえー、そうなんだ！」それは知らなかった」と感じる事が多く、驚きと発見がありました。参加された方々の表情から同様に感じられている方も多く、イベントの参加に大きな意味を感じてくださっているのではないかと思います。

会員になってまだ4カ月ほどですが、会員になってから「もつと勉強しないとー」という気持ちが強くなり、いつの間にか暇さえあれば仕事終わりにカフェに行つて勉強することが習慣になっています。自己の成長にもつながりますし、人としての幅も広がると思っているので、休みの日を有効活用できて非常に有意義な時間を過ごせていると実感しています。

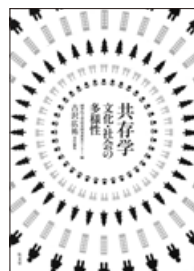
私は、まずは一人ひとりが国際問題に目を向けることで問題解決に一歩前進できると考えているので、これからできる限りJVCに協力していきたいと考えています。

おすすめ本

『共存学』

文化・社会の多様性

國學院大學研究開発推進センター編／古沢広祐責任編集
弘文堂 2012年 2500円(税別)
事務局次長 細野 純也



「共存学」とは聞き慣れない名前だが、國學院大學内の研究活動の一環として平成21年度頃から始まったものだそう。本書は、その一環として2011年1月に開催されたシンポジウムの内容と、共存学に関する研究の論考を収めたものである。冒頭は、宮城県気仙沼市で活躍されている「森は海の恋人」の畠山重篤氏の講演記録だ。

共存／共存学自体の詳しい定義は本書に譲るが、同様の意味合いを持つ言葉として「共生」という言葉もある。本書では、共生(という理想的状態)に至る前段階の、他者の受容や新しい関係の構築の可能性を模索している段階のことを「共存」と位置づけ、そこに光を当てる活動を共存学、としている。

掲載されている論考の内容は多岐にわたる。明治期和歌の伝統と革新、日韓のFTA政策、東京の大塚で生まれた小さなまちづくり運動――。一見なんのつながりもないと思える内容も、「共存」という視点を持つことで共通点が見えてくる。そしてそこから、他者と共存していく

ために重要な考えを抽出しようと試みる。キーワードとしては、社会関係資本、安心と信頼の定義、「よきもの」効果、生物多様性で言えば「人間の利便のため」以外の価値をどう捉えるか、あたりだろうか。

神道の研究・教育機関としての由来を持つ國學院大學だからこそ、本書の論考の中には、近世から現代において神社やそれにまつわる文化風習が地域でどのような役割を持ってきたのか、という視点を持ったものも多い。本書は続巻が3巻まであり、どれも東日本大震災以降の発行だ。被災地の復興においては、どこにおいても「コミュニティづくり」が脚光を浴びている。新しいもの／コトバだけでなく、従来からの地域内のつながりを改めて考える上で、本書は多くの示唆を含んでいる。

地方を訪れた際、お寺や神社があればお参りをするほうだ。自分にとっては通りがつただけでも、その地域にとっては固有の役割があるもの。手を合わせるだけでなく祭神や由来を知ること、その地域をより知る手がかりになるだろう。

お知らせ

ボランティア募集中

JVCでは、カレンダー発送作業やJVCコンサートの当日ボランティアを募集しております。

皆様のご参加をお待ちしております。

カレンダーボランティア

内 容：商品の封入、仕分け作業、商品の発送準備など
場 所：JVC東京事務所
申 込 先：カレンダー事務局まで [電話番号 03-3834-2388
メールアドレス hashimoto@ngo-jvc.net]

コンサート当日ボランティア

内 容：プログラム渡し、場内案内、プレゼント受付など
(東京と大阪で異なります)
日程・場所：[東京] 12月12日(土) 昭和女子大学人見記念講堂
/[大阪] 12月6日(日) いずみホール
申 込 先：コンサート事務局まで [電話番号 03-3836-4108
メールアドレス concert@ngo-jvc.net]

「夏の募金」報告

2015年「夏の募金」へご協力いただき、
ありがとうございます！ 指定寄付／無指定寄付すべてを含みます。

6月～8月末集計

851件 7,753,819円

募金集計

募金にご協力ありがとうございます
JVCの活動は、皆さまの募金によって支えられています。
JVCへの募金は、税制優遇措置を受けることができます。

指 定 先	期 間 (6～8月)
無 指 定	14,361,125
タイ	4,500
カンボジア	7,522,990
ラオス	866,365
南アフリカ	71,721
アフガニスタン	134,876
イラク	86,471
スーダン	90,000
パレスチナ	1,723,372
南タイ	4,140
コリア	66,219
東日本大震災	224,788
みどり一本	260,524
東京管理	31,900
調査研究	1,500
コンサート	315,214
合 計	25,765,705

上表に「夏／冬の募金」も含まれます。

投稿募集中

ぜひ、JVCや新しい会報誌に関するご意見・ご希望をお寄せください。また、「JVCなひと」への自薦寄稿も大歓迎！
JVCの会員になったきっかけや最近の関心事、ほかの会員の皆様へ伝えたいことなど、800字以内でお送りください。そして、「いまさら聞けないQ&A」でも質問を募集中です。会員になって長いけどそういえば聞いてみたいことがあった、まだ会員になったばかりだから教えてほしいことがある等々、なんでも結構です。皆様からの投稿をお待ちしております！

会 員 担 当 宮 西 ま で
投 稿 先 メール miyanishi@ngo-jvc.net
FAX 03-3835-0519

人 事

入 職



中原 和江 経理担当(8月1日付)
子育てが一段落して「やりたいことをやろう!」
と、JVCのボランティアチームに参加。NGO
とは無縁でしたが、今までの経験を生かせたら
嬉しい。何歳になっても新しい事を始められる
と同年代を元気づけたい!!

異 動

池田 未樹 アフガニスタン事業担当(8月1日付:経理担当より)
※イラク事業担当兼務
平野 将人 南タイ事業担当(8月1日付)
※ラオス事業担当兼務

退 職

樋口 正康 アフガニスタン事業／南タイ事業担当(8月31日付)
坂本 貴則 カンボジア事務所現地代表代行(9月30日付)
河村 由美子 ファンドレイジング担当(9月30日付)
谷山 由子 震災支援担当(南相馬)／イラク事業担当(9月30日付)

編 集 後 記

JVCのスタッフが一堂に会する会議。大変だけれど、各地域で働く現地スタッフに直接会える貴重な機会。安保法制通過前の国会前に出向き「日本は今までみたいに平和な国でいて」と願いながら、「でも東京の人は幸せそうじゃない。状況は厳しくても地域で助け合い、家族が支えあえるアフガニスタンのほうが幸せだと思う」と話していたアフガニスタンのスタッフ。「今日はラグビーの対戦ね!日本もせいぜい頑張って」とユニフォーム姿で会議室をあとにした南アフリカのスタッフは、まさかの展開にどんな表情だったやら。(〒)

JVC 国際協力カレンダー 2016

いのちいっぱい

写真: 竹沢うるま + 詩: 谷川俊太郎

カレンダーの収益は、アジア・アフリカ・中東と、
日本の震災被災地での支援活動に役立てられます。



壁掛けカレンダー



卓上カレンダー

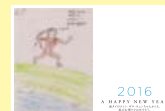
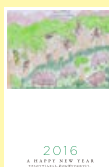
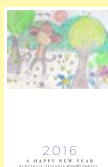
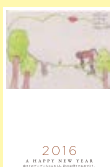


竹沢うるま
「日経ナショナルジオグラフィック写真賞 2014」
グランプリ受賞!



谷川俊太郎
日本を代表する詩人!

JVC スマイル年賀状 今年も活動地の子どもたちが描いてくれました。



詳細につきましては、本誌同封のチラシをご覧ください。



特定非営利活動法人
日本国際ボランティアセンター

日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられるアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉で、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

JVCでは会員を募集しています

会員数(10月1日現在) 合計1,061名(正会員556名 賛助会員505名)

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年4回この会報誌と年次報告書をお届けします。入会のお申し込みや、会員の方の住所変更などは会員担当の宮西まで。

メールアドレス: miyanishi@ngo-jvc.net

- 一般会員 10,000円
- 学生会員 5,000円
- 団体会員 30,000円

それぞれに
正会員と賛助会員があります

JVCのオリエンテーション(説明会)にお越しください

JVCの活動内容をご紹介します。
お気軽にご参加ください。

会場 JVC東京事務所 参加費 無料 予約 不要

第1月曜日 午後7:00~8:30
第2・第4土曜日 午後2:00~3:30

ウェブサイト: <http://www.ngo-jvc.net/>

メールアドレス: info@ngo-jvc.net

Facebook NGOJVC

twitter @ngo_jvc

◎発行 = 日本国際ボランティアセンター(JVC) 〒110-8605 東京都台東区上野5-3-4 クリエイトOne秋葉原ビル6F TEL 03-3834-2388 FAX 03-3835-0519

◎発行人 = 谷山博史 ◎編集人 = 大野和興・長谷部貴俊 ◎編集スタッフ = 榎田秀樹・細野純也 ◎デザイン = 渡部健 ◎印刷 = 株式会社ベスト・プリンティング

本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。本誌は、日本の森の間伐材を有効利用して作られた用紙「間伐材印刷用紙」(古紙90%・間伐材パルプ10%)で作成しました。

